

---

MOON-4 夜叉 4 < 2 6 >

みづき海斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

MOON - 4 夜叉 4 < 26 >

### 【Nコード】

N2767N

### 【作者名】

みづき海斗

### 【あらすじ】

遂に和人と巡り会えた裕希。そしてつかの間の安らぎが訪れる。そして朝子にも……。

MOONシリーズ 夜叉4 最終章 第2話です。

1 月夜（がつや） - 2 （前書き）

どろどろお楽しみ下さい。

## 1・月夜（がつや） - 2

「随分、背が伸びたな、裕希。」

その和人の言葉に、ブラックのキリマンをリビングのソファで飲みながら、和人のＴシャツを借りた裕希が答える。

「育ち盛りだから。」

裕希はミルク入りのアイス・コーヒーを飲みながら答えた。「和人は相変わらずだね。……ってか、俺和人と記憶を共有してるみたいなんだ。」

「そう。」

「だから、夜叉の言った通り、和人の声を頼りにここへ来れたんだ。」

「裕希くんは強くなったよ、和人さん。」

傍らの早坂が、「桜相手に対等に闘ったんだから。」

そして、「不破和人さん……また、会えるとは思っていなかったよ。」

そんな早坂の言葉に、和人は微笑を浮かべるだけだった。

見る者全てを魅了する、その微笑。

「アップル・パイが焼けたわよ。」

カウンター・キッチンの中から朝子が声をかける。「一番、大きいの食べたい人！」

「はい！」

裕希は元気よく、手を上げた。「朝子さんの手料理なんて久しぶりだよ！ねえ、和人も早坂さんも夜叉も手を上げなよ！本当に美味しいんだから。」

と、言うつとテーブルに身を乗り出し、強引に、

「こらっ、裕希くん！」

「裕希。」

手を掴み上げさせた。

「アップル・パイなど。」

夜叉がぼそりと呟く。「平安の都にはなかったぞえ。」

「ええ！じゃ、夜叉にはいっぱい食べてもらわなきゃ、ね、和人。」

「そうだね。」

和人はくすくすと笑い、「朝子、夜叉のを一番大きく切ってくれ。」

「はい。」

朝子が答え、夜叉は和人を横目で睨んだ。

「若。冗談にも程があるぞえ。」

「そう？」

和人は平然と答え、席を立ち、「朝子。手伝うよ。」

キツチンの方へ向かって行った。

「ねえ。」

裕希は小さな声と手ぶりで夜叉と早坂を呼び、「ちよつと2人だけにしておこうよ、和人と朝子さん。」

そして、「早坂さんの言う、謎解きの話しはバルコニーにしよう。」

早坂はいち早く、それを察し、

「そうだね、裕希くん。」

それとは対照的に、

「どうしてじゃ？裕希。」

と、夜叉。

「夜叉。」

裕希は夜叉の耳元で、「和人と朝子さん、両思いなんだ。だから、ちよつとだけ2人だけにしようよ。」

「そうかえ。」

夜叉は口元に笑みを浮かべ、「それなら」

キツチンへ声をかけた。

「少し早坂殿と裕希とで外の空気を吸ってくる故、作戦会議はバ

ルコニーで。」

「おい、夜叉！」

和人が慌てて振り返る。「ここでいいじゃないか。」

「まずいのだよ、外の空気に触れて食べた方が美味しいだろ？」

「そうそう！」

裕希は席を立ち、「じゃ、朝子さん待ってるからね！」

「裕希くん！」

朝子が顔を赤くして少年の名を呼ぶ。

3人は手を振り、バルコニーに席を移した。

カウンター・キッチン内に残された和人と朝子。

「あいつら、何考えてるんだ。」

和人は不機嫌そうに言った。

「いいじゃない、別に。」

逆に朝子は上機嫌だった。「和人も食べてよ、朝子さん特製のアップル・パイ。ジンジャー入り。」

「御言葉だけ頂戴しとく……」

「駄……目！はい、味見。」

と、その一欠けらを和人の口元にフォークで差し出す。

「……」

仕方なく目を閉じて、口を開ける和人。

「ねえ、和人。」

そんな彼に朝子は言った。「あの言葉本当？」

アップル・パイの欠片を食べながら、

「何の言葉？」

「忘れたの？」

少し拗ねたように、朝子が言う。

和人は目を開いた。

そして、

「朝子も味見してみる？アップル・パイ。」

「和人。」

彼は彼女の長い髪に手をかけ、抱き寄せた。

「美味しいよ、アップル・パイ。」

そして、2人の唇が重なった。

ややあつて、朝子が呟いた。

「もう、何処へも行かないでね。」

「約束するよ、朝子。」

心配そうな朝子を、和人は両腕で抱きしめた。

「20年前」

朝子が思い出した風に、「九桜から私を助けてくれたのが貴方でよかった。もし、九桜が私の血を奪っていたら今、私はこんなじやなかったと思う。『闇』に染まっていたと思う……」

「そう。」

「それからずっと貴方に育てられて、『今の私』がいるの。『闇』と『光』の狭間に立っているけど、裕希くんと同じように貴方がいるから『闇』に染まらない。」

「そうだね。」

和人は朝子を抱きしめる両腕に力を込めた。

「ずっとそのままいてくれ、朝子。」

「和人がいる限り……だって、初恋の人とやっとな想いになっただんだもの。」

「そうなの？」

「鈍いなあ。」

朝子は和人の両腕から身を離し、右手の中指で彼の額をこつんとつつく。「本当、和人って鈍感なんだから。」

「悪かったね。」

和人は苦笑して言った。「でも、もう一人にはさせないから。秀も桜から奪い返してみせる。」

「和人……」

「ほら、また不安そうな顔をする。」

今度は和人が朝子の額をこづく。「大丈夫。夜叉もついてる。」

その時、

「ねえ！朝子さん、和人！」

バルコニーから裕希の元気な声が聞こえた。

「アップル・パイまだ？」

「はいはい。」

朝子は和人に笑みを浮かべ、アップル・パイを切り始めた。



1 月夜（がつや） - 2 （後書き）

また、次回にお会いしましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2767n/>

---

MOON-4 夜叉 4 < 2 6 >

2010年10月10日12時58分発行